

短 報

石川県輪島市に漂着したナガスクジラ
Balaenoptera physalus

田島木綿子¹⁾, 山田格¹⁾, 角田恒雄¹⁾, 新井上巳²⁾,
梅谷綾子³⁾, 小松由章⁴⁾, 東出幸真⁵⁾, 南部久男⁶⁾

¹⁾ 国立科学博物館 動物研究部

〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1

²⁾ 日本セトロジー研究会

³⁾ 習志野保健所

〒275-0012 習志野市本大久保5-7-14

⁴⁾ のとじま臨海公園水族館

〒926-0216 石川県七尾市能登島曲15-40

⁵⁾ のと海洋ふれあいセンター

〒927-0552 石川県鳳珠郡能登町字越坂3-47

⁶⁾ 富山市科学博物館

〒939-8084 富山市西中野町1-8-31

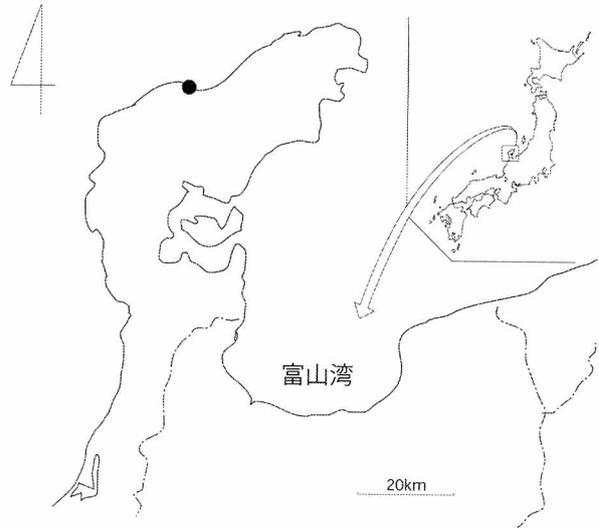


図1 ナガスクジラの漂着場所（輪島市袖ヶ浜）



図2 漂着したナガスクジラ. 上, 波打ち際; 下, 堤防下に移動中 (いずれものとじま臨海公園水族館提供)

Note on a fin whale stranded at the coast of Wajima-city, Ishikawa prefecture, Sea of Japan.

¹⁾ Yuko Tajima, ¹⁾ Tadasu K. Yamada,

¹⁾ Tsuneo Kakuda, ²⁾ Kazumi Arai,

³⁾ Ayako Umetani, ⁴⁾ Yoshiaki Komatsu,

⁵⁾ Yukimasa Higashide and ⁶⁾ Hisao Nambu

¹⁾ National Museum of Nature and Science, Department of Zoology; 4-1-1 Amakubo, Tsukubashi, Ibaraki 305-0005, ²⁾ The Cetology Study Group of Japan, ³⁾ Narashino health center; 5-7-14, Honookubo, Narashino-shi, Chiba, 275-0012, ⁴⁾ Notojima Aquarium; 15-40 Notojimamagari, Nanao-shi, Ishikawa 926-0216, ⁵⁾ Noto Marine Center; 3-47, Oosaka Noto-cho, Housu-gun, Ishikawa 927-0552, ⁶⁾ Toyama Science Museum; 1-8-31, Nishinakano-machi, Toyama-shi, Toyama 939-8084

はじめに

ナガスクジラは日本海を代表する大型鯨類であるが、近年の知見は少なく、種の鑑定が確実なストランディングの記録も少ない。筆者らは2004年に輪島市に漂着したナガスクジラを調査する機会を得たが、この個体はDNA検索でもナガスクジラであることが確認された(東出, 2005; 日本鯨類研究所, 2011)。北陸地方の漂着鯨類の剖検結果

はオウギハクジラ、ハンドウイルカ、ハナゴンドウで報告されているが(真柄ら, 2009, 2010; 田島ら, 2007, 2012)、ナガスクジラは漂着自体が希であるので、計測値や剖検結果を報告することとした。

方法

2004年12月20日、石川県輪島市袖ヶ浜で、ナガスクジラ科のクジラの漂着死体が打ち上がり（輪島市水産漁港課による）、12月21日輪島市農林水産課・小松由章（のとじま臨海公園水族館）により現地確認され、同日重機により、波打ち際から堤防下に移動された（図1, 2）。12月24日に、山田格（国立科学博物館）田島木綿子（同）、角田恒雄（同）、新井上巳（同）、梅谷綾子（同）、東出幸真（のと海洋ふれあいセンター）、南部久男（当時富山市科学文化センター）が現地で剖検を行った。

結果

計測値

1. 性別 メス

2. 計測値 (cm) 左側

体長	約570
上顎先端 - 口角	485
上顎先端 - 目	486
上顎先端 - 胸びれ前	424
上顎先端 - 背びれ先端	140
上顎先端 - へそ	283
上顎先端 - 生殖孔	203
上顎先端 - 肛門	186
上顎先端 - 畝後端	264
尾びれ前縁長 (右)	85
尾柄部～尾びれ正中切痕底	左45, 右44
尾柄幅	16
畝のヒダ数 (右側)	29
脂皮の厚み (臍部)	
背側2.5cm、体側2cm、腹側2cm	

剖検結果

1. 外貌所見

外形：体表は表皮のほとんどが脱落し、脂皮が露出する。

そのため全身は白色を呈し、腹部を中心に高度膨満する。左右下顎骨は認められるものの漂流中に顎関節は破綻しており離脱しかけている。鼻骨より吻側頭骨は完全に破損して失われ、皮膚のみが残存する。左右ヒゲ、左右橈骨および尺骨、右上腕骨は失われている。

外傷：観察した限りでは目立ったものは認められず。

脂皮：体表の腐敗具合と比べると、その進行は軽度である。白色を呈し、弾力性あり。

筋肉：新生児から幼体に特有な淡紅色（成体は赤色調強）を呈す。弾力性に乏しい。

乳腺：断面は赤桃色を呈す。乳汁は認められず。

2. 内臓所見

確認できた臓器は心臓、肺、肝臓、腎臓、胃、腸、左右卵巣、子宮、膀胱であった。その中でも生殖器が最も腐敗進行が軽度であった。

<胸腔・腹腔>

各臓器の位置関係は著変なし。

<消化器>

肝臓：腐敗進行が高度のため所見とれず。

食道：内容物は認められず。粘膜は腐敗進行高度。

胃：全胃を通して内容物は認められず。粘膜は腐敗進行が高度のため所見とれず。

腸管：盲腸を確認する。小腸は全長を通して内容物は認められず。粘膜は黄褐色を呈す。腐敗進行高度。盲腸以下肛門までの大腸には黄褐色粘土状の内容物（おそらく胎便）が充満する。腸管全長68m（小腸66m, 大腸2m）。

<泌尿生殖器>

腎臓：周囲脂肪は泡沫状。腐敗進行高度のため所見とれず。

膀胱：尿貯留は認められず。

卵巣：左右ともに表面はヒゲクジラに特有の分葉状である。赤桃色を呈す。卵胞、黄体および白体は認められず。

子宮・膣：未発達。左右子宮角の大きさに差違は見られない。

<循環・呼吸器>

心臓：心臓外形は正常。周囲脂肪は腐敗する。

肺：左右とも外形正常。

3. 骨格

頭骨、体幹骨格などは全般にまだ化骨していないものが多く、そのほとんどが軟骨であり、メスで容易に入刀できた。

考察

今回の漂着個体は、腐敗進行が高度であったため、漂着原因あるいは死因に繋がる所見を得ることはできなかった。本種は、北半球で成体の体長が24m未満で、新生児の体長は6~6.5mである (Jefferson et al., 1993)。本個体は、体長が約5.7m、筋肉の色調（腐敗していることを考慮したうえで）、大部分の脊椎骨が未骨化、胎便（大腸のみに認められた黄褐色粘土状内容物）の存在、

より新生児の可能性が示唆された。何らかの理由で、親とはぐれた、又は親が保育拒否した等の社会的要因が漂着および死因の一要因であった可能性がある。死産であった可能性もあるが、肺の死後変化が大きかったことなどのため断定には至らなかった。

謝辞

調査にご協力いただきました輪島市役所農林水産課、のとじま臨海公園水族館、のと海洋ふれあいセンターに厚くお礼申し上げます。

文献

Jefferson, T.A., S. Leaterwood and M.A. Webber. 1993. FAO Species identification guide. Marine mammals of the world. Rome, FAO. 320p.
(山田格訳. 1999. 海の哺乳類FAO種同定ガイド, 336pp. NTT出版. 東京.)

東出幸真, 2005. ナガスクジラの赤ちゃんが漂着. のと海洋ふれあいセンターだより, 能登の海中林, 22:7.

真柄真実, 栗原望, 山田格, 南部久男, 石川雄士, 2010. 富山県氷見市に漂着したハンドウイルカ. 富山市科学博物館研究報告, 33:109-112.

真柄真実, 田島木綿子, 谷田部明子, 山田格, 坂井恵一, 福島広行, 横井将大, 吉田俊憲, 台蔵正一, 南部久男, 2009.

石川県珠洲市に漂着したオウギハクジラ, 富山市科学博物館研究報告, 32:117-120.

日本鯨類研究所, 2011. ストランディングレコード

<http://www.icrwhale.org/stranding0106.html>

田島木綿子, 山田格, 南部久男, 2012. 富山県魚津市に漂着したハナゴンドウ *Grampus griseus*, 富山市科学博物館研究報告, 35:111-112.

田島木綿子, 谷田部明子, 角田恒雄, 台蔵正一, 南部久男, 山田格, 2007. 石川県志賀町に漂着したオウギハクジラ, 富山市科学文化センター研究報告, 30: 85-87.